

Vol.23 No.2 '00

2001年2月28日 発行 目次

〈特別講演〉

消化管粘膜上皮の代償性反応5

大阪医科大学 第2内科 勝 健一 他

〈教育講演〉

腸管における水、電解質の吸収・分泌と体液調節13

静岡県立大学食品栄養科学部 鈴木裕一

〈ワークショップ〉

下痢を見直す(司会総括)20

大阪医科大学 第2内科 齊藤 治

弘前大学 第3内科 中村光男

腸粘膜局所のoxidantによる、Ca⁺⁺およびcAMP依存性のCl⁻分泌亢進による下痢悪化のメカニズム ...11

第一東和会病院 内科 杉 和憲 他

Nitric Oxideの分泌性下痢に与える役割— 大腸粘膜における電解質輸送の観点から—25

京都大学 病態代謝栄養学講座 中村 洋 他

ラット小腸切除後と腸上皮細胞株のAquaporin発現変化とその調節機序26

滋賀医科大学 第2内科 辻川知之 他

Cholera toxin、clostridium difficile toxin Aに対する

ヒト大腸上皮細胞(HT-29)のIL-8産生と抑制についての検討29

新潟大学 第3内科 田代和徳 他

慢性下痢症の動物モデルの検討:合併症を含めた合理的治療法開発のために30

国立国際医療センター 消化器科 正田良介 他

便中Clostridium difficile toxinと下痢症状に関する研究33

秋田大学 第1内科 伊藤博彰 他

感染症腸炎に伴う下痢症34

聖路加国際病院 内科(消化器) 堀木紀行 他

糞便中有機物質から見た全身疾患に伴う下痢の病態と特徴35

弘前大学 第3内科 柳町 幸 他

腹痛と便通異常を訴える患者における24時間内圧記録による小腸運動の検討39

東北大学医学部 心療内科 野村泰輔 他

外来神経切除をともなう腹部外科手術後の下痢の発生機序と

“ileocolonic brake mechanism”の活性化による下痢に対する新しい治療戦略について.....45

慈恵医大 外科 中田浩二 他

| | |
|--|-----|
| 慢性下痢に対するアルカリイオン水の有用性の臨床的検討 | |
| — double blind placebo control study による— | 52 |
| 国立大蔵病院 消化器科 田代博一 他 | |
| 〈DDW プレナリーセッション〉 | |
| ¹³C標識脂肪を用いた呼気消化吸収試験の検査方法の簡略化に関する検討 | 57 |
| 弘前大学 第3内科 梶 麻子 他 | |
| 腹膜炎モデルにおける小腸上皮ペプチド輸送担体の発現とステロイドの効果 | 61 |
| 山形大学 第2内科 安 紅進 他 | |
| 〈ミニプレナリーセッション〉 | |
| Basolateral Endocytic Pathway in the Gastric Epithelial Cells of Rat Stomach <i>in vivo</i> | 65 |
| Graduate school of health and nutrition sciences, Mamoru FUJITA 他 | |
| シサプリド治療前後における糖尿病性胃麻痺患者の胃運動について | |
| — ¹³ C-acetate呼気胃排出機能検査による検討— | 73 |
| 弘前大学 第3内科 渡辺 拓 他 | |
| 空腹時呼気中水素・メタンガス濃度1094例の検討 | 78 |
| 東邦大学 第1内科 瓜田純久 他 | |
| 小腸粘膜の増殖におけるluminal factorとsystemic factorの意義 | 82 |
| 近畿大学 第2外科 橋本直樹 他 | |
| 腺管分離法により分離されたモルモット消化管上皮での decay-accelerating factor (DAF)の発現と消化管でのisoformsの局在について | 85 |
| 名古屋市立大学 第1内科 溝下 勤 他 | |
| 腸上皮細胞(Caco-2細胞)におけるinterleukin-8産生に及ぼす 各種脂肪酸の影響とその作用機序の検討 | 86 |
| 大阪医科大学 第2内科 田中正剛 他 | |
| 実験的糖尿病における小腸二糖類水解酵素活性への食餌組成の影響 | 90 |
| 国立健康・栄養研究所 応用食品部 成田真由美 他 | |
| D-タガトース摂取によるラット小腸二糖類水解酵素活性並びに盲腸発酵に及ぼす影響 | 94 |
| 国立健康・栄養研究所 応用食品部 山田和彦 他 | |
| スクラーゼ・イソマルターゼ遺伝子の転写調節機構： フルクトース摂取による核内因子Cdx-2の脱リン酸化 | 98 |
| 静岡県立大学食品栄養科学部 栄養生理 合田敏尚 他 | |
| 難消化性糖類がラット腸管のカルシウム吸収におよぼす影響 | 101 |
| 北海道科学・産業技術振興財団 峯尾 仁 他 | |
| 糖転移酵素の腸内細菌叢への改善効果 | 107 |
| 天野エンザイム株式会社 苅谷金弥 他 | |

無症状ラクターゼ欠乏者に対するラクターゼ製剤の投与

— 胃内活性および呼気中水素濃度の検討 —110

名古屋大学大学院医学研究科 健康栄養医学 高 開屏 他

〈ポスターセッション〉

胃および十二指腸管腔内の水素・メタンガス濃度の検討113

東邦大学 第1内科 瓜田純久 他

糖尿病を有する膵機能不全患者に対する膵消化酵素治療後の血糖変化118

弘前大学 第3内科 松橋有紀 他

脂質の構造と膵外分泌122

昭和女子大学大学院 稲毛寛子 他

国内と海外における消化酵素製剤の比較126

天野エンザイム株式会社 小川知成 他

糖尿病患者および健常者で各種食物によって食後血糖値に違いが生じるか130

弘前大学医学部 第3内科 松橋有紀 他

ステロイドが著効した蛋白漏出性胃腸症の一例135

弘前大学 第3内科 村上 宏 他

ビタミンB₁₂欠乏性巨赤芽球性貧血を合併したクローン病の一例140

久留米大学 第2内科 消化器病センター 居石哲治 他

末期胃癌患者に対しtotal parenteral nutrition (TPN)による

栄養管理を行うことで長期生存が可能であった1例144

産業医科大学 第3内科 福島あゆみ 他

肝管空腸吻合術後、吸収不良症候群・蛋白漏出性胃腸症を呈した無痛性慢性膵炎の一例147

筑波大学臨床医学系 消化器内科 伊藤進一 他

核医学的検査が病態解明、治療法の選択に有効であった胃切除後消化吸收障害の一例153

金沢大学医学部 第2内科 武藤綾子 他

(第31 回日本消化吸収学会総会と共催のランチョンセミナーで発表の2 題を掲載する)

クローン病の発症機序を考える154

慶應義塾大学 内科学 教授 日比紀文

*Helicobacter pylori*除菌失敗の要因と対策166

北海道大学大学院医学研究科 分子病態制御学講座 消化器病態内科学 杉山敏郎

あとがき

平成12年度の日本消化吸収学会総会は第8 回日本消化器関連学会週間 (DDW-Japan) に参加するとともに第31 回を迎えた。健康保険山形健康管理センター高橋恒男先生を会長として、平成12 年(西暦2000 年・ミレニアム・千年記) 10 月25 日～ 28日にわたり、神戸市ポートピアアイランドのポートピア

ホテル、神戸国際会議場、神戸消化と吸収 臨時特別記念号 '11「消化と吸収」バックナンバー論文目次295国際展示場、ワールド記念ホールの4 箇所において開催された。今回の本学会総会は初めての消化器関連週間(DDW-Japan)に全面参加して開催されたもので、高橋恒男会長の御苦労は大変なものであったとお察する次第であり、心から本学会総会を主催された高橋会長に対し深甚の謝意を表したく存じます。

今回の学会では特別講演として、次回(第32 回)総会会長の勝 健一教授(大阪医科大学第2 内科)に「消化粘膜上皮の代償性反応」と題し御講演をいただきました。さらに教育講演、招待講演、シンポジウム、ワークショップ、一般演題(ポスター発表を含む)などが消化器関連学会とともに行われ、更めて本学会の意義が確認されました。

平成12 年度の本学会総会に於て以下のことが決議、承認されました。

先ず、荒川泰行理事長より諮問を受けた諮問委員会の平塚秀雄委員長より、本学会の活性化、躍進のために1. 会員の減少傾向に歯止めをかけるための方策、2. 役員・評議員の定年制の導入について、3. 2001年以降の学術集会のあり方、4. 学会の会則の変更について、5. 庶務・会計・編集各担当理事についての諮問が答申され承認されました。したがって70 歳に達した役員すなわち理事・監事及び評議員は平成13 年4月からは役員でなくなり、それぞれ名誉会員、功労会員として処遇されることとなります。特に理事の半数以上がこれに該当される。故に、学会がこの改正により一段と活性化し、会員が増加しなければ意味をなさない。むしろ今後が大切であります。名誉会員、功労会員となられた先生方は学会の功労者であります。今後とも学会・会員のための御指導・御鞭撻を宜しくお願い申し上げます。

また本学会賞に加えて「冠」学会賞(2001年より2005 年までの5 年間)が設けられたとも本学会にとって喜ばしいことであります。

本誌「消化と吸収」の前号No 1 のボリュームが少なく心配されましたが、今回のNo 2 はこれを補って余りあり安心した次第であります。当学会としてはDDW-Japanへの初の全面参加ということで、開催期日の10月末であった関係などでNo 1 への原稿が遅れこのようなことになったと思われる。次年度から調節の必要があると考えられます。

西暦2001年という、21世紀初年の記念すべき年に本誌が発行されます。なお13 年度から編集担当に理事の朝倉先生が就任されることとなり、本誌の益々の充実が期待されます。

なお、今回は大阪医科大学第2 内科勝健一教授の下、第32 回の本学会が第9 回日本消化器関連学会間の中で開催され盛会が期待されております。会員の皆様のご支援ご参加を心よりお願い申し上げます。

村上義次